

写真で結ぶ、日韓文化交流

NPO「魅せる北海道」

理事長 谷口 勲夫



「一枚の写真」が持つ表現の多様性を最大限に生かし、写真を通して北海道の素晴らしさを知ってもらおうと私たちNPO法人「魅せる北海道」は、今年三月に韓国ソウルで「This is Hokkaido・北海道賛歌」写真展を開催しました。

この写真展は国土交通省の支援と韓国で最も伝統ある写真愛好家団体「東亜日報写真東友会」のお力をかり、写真と人との関わり、ふれあいが目的でした。

会場には、ベルーの地上絵など五大大陸の大地を地球規模で撮り続ける航空写真家・清水武男、世界自然遺産の知床をテーマとしている後藤昌美、厳冬の北海道の美しさを捉えた深山 治、北海道の第二線で活躍し続けている写真家三氏の作品四十五点を展示しました。

六日間の会期中二千人を越える数多くの写真ファンが訪れ、雄大な北海道の四季に魅了され、ラベンダーやひまわりの開花時期、流水の見える撮影ポイントについて日本語が堪能な高齢者の方がたから質問攻めにありました。

同時に開かれた日韓写真家による「韓日未来フォーラム」が同時通訳で進められレンズを通して見た写真文化をテーマに意見交換が行われた、なかでもむかし日本で写真の初期教育を受けた人たちが韓国に帰国、写真を技術を広める開拓者となった事実を知り、日本との深い関わり歴史に興味ある討論が行われました。また街を歩くと繁華街の公園では樹木の間張り巡らしたロープに作品をぶら下げた、学生による野外写真展に出くわし大勢が足を止め見入る姿に韓国若者の写真に対する熱いエネルギーに驚きました。

これらを受けて私どもNPO「魅せる北海道」は、活動拠点である中山峠「写真の森美術館」において洞爺湖サミットを記念し開幕前の二十日間、韓国作家招待写真展を実現致しました。これら作品は東亜日報東友会が韓国のプロアマ写真家から募集した、韓国の風土や人間模様を写した「錦繡江山(美しい山河)、大韓民国」のタイトルで約百点を展示致しました。

韓国の写真家による作品は書店でも目に触れる機会が少なく、オープニングには「北海道写真協会」の武藤省吾副会長ら審査委員の皆さんにもお声をかけ心に残る美しい韓国の自然を鑑賞して頂き有り難うございます。韓国からも北海道撮影ツアーをかねて来道した写真家二十人が「道写協」の皆様と写真を通じ互いの文化を知る交流が出来たことを大変感謝しております。

韓流ブームが映像から始まったように、写真は世界を結ぶ共通言語を合言葉に、国を越えて人びとが感動するのきっかけを発信することがNPO「魅せる北海道」の最大の目標としています。

私の一枚=随想

〈シリーズ52〉

恵庭支部長

西澤 實



思い返せば写真に携わったのは、六歳くらいの時だったと思う。

その時は、友達のお父さんが木箱に中判サイズのネガばかりを数十枚束にして無造作に保管していたのが記憶にある。当然ネガだから何が何だか解らず、友達が明るい窓ガラスにネガを貼り付けたのだ。そうすると上半身の兵隊さんらしい姿が現実と違う表現で写っている。それが写真だとしばらく思いこんでいた。今思えば、それが私と写真との出会いだと思っている。

そのきっかけを作ってくれた友人の父上が、今月八十四歳で人生のアルバムを閉じた。原稿依頼を受ける最中の出来事なので、ふと懐かしく走馬燈のように浮かんだ。

本題、私の一枚を選ぶのに迷いがあつたが、私が好んで撮影するスナップ写真に「親友のオシャレ」が良いのではと……

きっかけは、雀荘で出会い互いに気心が通じ、その中で理容院に明日行くと聞き、私はあの立派な髭を何とかしなければと思いついて「この一枚」は狙って撮れるものでもないし、また、狙わないと撮ることができないと思いついて、脚立を持ち込んで俯瞰し、話しかけながら表情のピークが大切と思いついて、距離感を考え、今だ！シャッターを優しく押した。

難儀だった事は、室内で光量不足の中、また、真上から撮るので三脚が使用できない状況(ストロボは考えていない)で、なんとか撮れたことに感謝している。

感じたことは、スナップは距離感のつかみどころこそが勝負ではないかと……

私はスナップ写真が好きなのに絶好のチャンスを知れず逃している。それは、その時カメラが無いのである。撮影技術より被写体記憶装置を可能な限り手元にと、スナップ撮影教本には書いていない！